

施設番号	66-0959
施設名	うめのき保育園
施設所在地	小平市鈴木町2-186-4
法人名	社会福祉法人小松福祉会

1，活動のテーマ

〈テーマ〉

博物館

〈テーマの設定理由〉

虫への興味から探究活動が始まった。虫に関連した遊びから大人の想像とは違う形で子どもたちが遊びを展開させていった。

2．活動スケジュール

9月～2月

3．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

子どもたちの興味関心が、どこにあるのかという事を担任同士で共有をして、活動や環境設定を展開した。又、このような活動で、どのような育ちをしてほしいのかという願いの共有を行った。

（具体的に準備した物の一例）

- ・図鑑
- ・虫かるた
- ・虫かご
- ・画用紙、色紙、絵具、接着材料等の造形材料
- ・空き箱
- ・ペットボトルキャップ
- ・紙コップ

4. 探究活動の実践 (活動の実践)

9月～11月「虫博物館とお店屋さん」

- ・虫探しをきっかけに、子どもたちの関係性が変わってきた。
- ・虫への興味と子ども同士の関係性の発展を期待し、虫かるたを準備する。
- ・ある年少児が、虫かるたを気に入って持ち歩く。その様子に、年長のM君が、「かるたがなくなっちゃう…」と心配する様子が見られたので、「年長さんで、代わりに虫かるたを作ってくれない？」と聞いてみる。「いいよ」と、年長児で図鑑を見ながら描き始める。担任は、虫かるたを作る提案をしたが、子どもたちは、様々な虫の絵を描く事に気持ちを向け、数週間かけ、子どもたちの描いた虫の絵が増えていく。
- ・かるた作りよりも、虫への興味を強く感じた担任が、図鑑づくりへの転換を提案すると子どもたちで相談して、「博物館にしよう!」と決まる。
- ・年長男児Mの姿...描きたいけれど自信のない事を大人に伝えてくる。「なんでも良いから描けそうなものがある?」と聞いてみると、「かまきりは描けるよ」と丁寧に描く。自分自身の中で上手く描けた事に自信をつけ、次々に描き始める。描いたものを切り取るのも、細い虫の足が切れてしまわないように丁寧に切り取る。
- ・このような、M児の姿や、虫に詳しい年長男児たちで、大人の想像よりも、小さく繊細な虫の絵が多くできる。
- ・年長男子で描いた絵に名前や住処を書き込んでいく。→博物館展示用にカラーコピーする→切り取ってペットボトルのふたにつけて動かして遊べるようにする等、子どもたちで博物館のイメージが広がっていき準備を進めていく。
- ・年長男児で、クラスの友だちに、やま組で博物館をやりたい事を伝える。そして、お店屋さん等、博物館遊びで、それぞれやりたい事はあるのか、友だちに聞いてみる。レストラン、クレープ屋さん、魚釣り屋さん等、やってみたい事が出てきた子どもたちは、グループを作り、それぞれに準備を進める。
- ・他のクラスも招待したいという声も年長男児からあがったので、子どもたちで博物館を行う日をカレンダーを見て決めて、招待状やチケット作りを進める。
- ・博物館の日が迫ってくると大量にできた虫をどのように飾るのかを子どもたちで相談し、住処ごとに飾り、箱と分類のタグをつける事になる。
- ・”やまぐみ博物館とお店屋さん”の看板や配置図を子どもたちで相談し作る。
- ・《博物館遊び当日の様子》
- ・それぞれに、楽しそうに自分の役割を楽しんだり、お客さんにもなりながら遊んでいた。
- ・年長男児のK君は、当日、お客さんがたくさん来る中で、警備員の役割をみつけ楽しんでいた。



11月～2月「恐竜博物館とお祭り」

- ・虫博物館後すぐに、年長男児Sが、「次は恐竜博物館だね」と大人に話す。
- ・”クラスとして行うならば2月までには行いたい”という見通しを子どもに伝えてみる。
→「やりたい」との声があがる。
- ・「保育園終わる前(卒園前)に、やらなきゃ。」と年長男児がカレンダーを見ながら計画を立てる。
- ・前回のような虫の大きさを作ろうとしていたので、「恐竜は大きいから箱で作る？」と提案してみた。→大人の思いとして、立体物や工作に繋げていきたかった。
- ・年長男児で、2週間位かけ、図鑑を見ながら特徴を捉え、20体ほどの恐竜を作成。
- ・昆虫博物館が終わった時に、「今度は、お土産屋さんがあるよね。」というアイデアが出ていた。今回の恐竜博物館で、恐竜キーホルダーを、お土産として作ろうと年長男児で決める。直径3cmほどの紙コップの底を切り取り、恐竜を描く。小さい底面に緻密に描き色付けをしていく。描く事が難しいと感じていた年長男児Mは、大人と相談して、紙コップから底面を切り取る・紐を切り結ぶという役割を見つけ、活動に没頭する。キーホルダーをお客さん全員分は作れないから、くじ引きにするという案を子どもたちで思いつく。
- ・恐竜に対しての興味や知識が豊富な年長男児は、恐竜の展示方法は、三畳紀、ジュラ紀、白亜紀の3期に分けて展示したいと展示方法にもこだわる。又、餌やりコーナー等、お客さんが楽しめるようなアイデアも子どもたちからでて、相談しながら作成していく。
- ・カレンダーを見ながら本番の日が近づいてくると、恐竜博物館の制作だけでなく、「昆虫博物館の時みたいに、他のクラスを呼びたい。」という声や、「女の子たちは、恐竜を知らないよね。プリキュアとかやれば良いんじゃない」という声が、年長男児からあがる。男児3人で、同じクラスの子どもたちに、自分たちは恐竜博物館をやろうと思っているという事と、皆は、何かやりたい事はあるかという事を聞いてまわる。それぞれに、お弁当屋さん、かき氷屋さん、りんご飴屋さん、焼きそば屋さん、クレーンゲームコーナー、積み木での街づくり、お客さん役等の声があがる。
- ①恐竜博物館とお店屋さんを組み合わせた内容で遊ぶ②他のクラスのお友達を招待すると決まり、本番の日に向けて、それぞれ準備を進めていく。
- ・博物館や様々なお店をクラスの中に配置させるため、配置図が必要だと年長男児で相談し、棚や机を含めながら緻密に保育室の空間図を描き、お店の配置は、大人に描いてほしいと声がかかり、大人も協力をする。
- ・当日は、それぞれに役割を感じ楽しんでた。



5. 振り返り(保育士の気づき)

- ・ほとんどが子どもたちのアイデアや力で活動が進んでいった。その姿が“主体性”という言葉と繋がった。
- ・クラスの年間のねらいと子どもの育ちが繋がった。年間を通して、それぞれの成長や、仲間関係の変化を感じた。
- ・子どもたちで活動をする決めても、期間が長かったり、お店屋さんのように量産が必要な活動は、興味・関心や集中力をずっと継続する事は難しいと感じた。カレンダーを使い見通しを子ども自身が持ちながら、今日は活動に向けての準備をする、今日は全く違う遊びをする等、せねばならぬの活動ではなく、自分たちで活動を選択できる雰囲気づくりを大人は心がけた。このような雰囲気作りも、子どもたちの又やりたいという気持ちに繋がったように感じた。
- ・友達と楽しみながら始めた事で、苦手意識のあった事に自ら取り組み、できたという経験と、出来上がっていく楽しさを共に感じる事が出来た。そして、自分たちの活動を皆に認めてもらう事で、更に自信に繋がったように感じる。